閣下と金色の死神

天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閣下と金色の死神

【Ｎコード】

Ｎ０６７１Ｈ

【作者名】

天使

【あらすじ】

これは、クウガに出てくる怪人グロンギのゴ・ガドル・バを出しました。クウガとの闘いで時空に飛ばされてしまったガドルは、グロンギ特有の闘争本能を失ってフェイトの部下になりその後の彼の人生を勝手に書いたの物です。また、この小説を見て不愉快に成るようでしたら他の作者のページに行っていただけても結構です。

プロローグ：過去から現在へ

かつてグロンギ、ゴ族最強の戦士は現代のクウガによって倒された筈だった・・・・・・

「ボ　・・・・・　ボ　ボ　ザ　？」

（こ・・・・此処は？）

男は黒い軍服を着ているがクウガとの闘いでボロボロだそれどころか満足に身体を動かさない。

見渡すとそこは今までいた世界とは違う。

森林だけの静寂な世界。

やっと自分に最後が訪れるのを悟った。

彼は、今までの自分の道を振り返っていた。

クウガに倒されるまで何の関係無いリントを殺して殺してきたのを男は死を覚悟したが周りの樹を支えに使いながら歩き始めた。

彼、いや彼らの王ダグバは居なくなった。

それどころか主人の様な人の気も感じない。

何のために俺はここまで来たのかと絶望した。

そこに微かな音が茂みから聞こえた。

「ザ　ッ　！　？」
（はっ！？）
闘いでついた癖で構えに入り姿を変えた。
身体の色が変わりカブトムシ状の怪人に変化した。
しかしベルト状は壊れかけている。
そう彼は戦闘民族グロンギだった。
茂みから出てきたのは１０歳の少女だった。
髪は、金髪で右手には黒い鎌を持っていた。
「あ、貴方は一体！？」
少女は不思議そうにこっちを観察し始めた。
彼にはもう戦う力は残っていない。
何とか変身して隙を見せない様に構えているだけだった。
「ボ　、　ボ　ソ　グバ　サ　ボ　ソ　ゲ　・　・　・　・　・」
（こ　、　殺すなら殺せ・・・・）
「バルディッシュ！戦闘モード解除！！」
（し、しかしマスター！弱った振りしてるのでは？）

「良いから、はやく」

（りょ、了解）

少女は、鎌を納めた

「バ・・・バ ゼ ボ ソ ガ ン ・ ・ ・ ？」

（な・・何故殺さん・・？）

彼女は、私のグロンギのベルトを手から光を出して治療した。

その居心地が良く意識を失った。

気付くとそこは色々の物が並んでいる場所リント達は、部屋と呼ばれる場所だった。

自分の着ている服を見ると灰色のズボンとトレーナを着ていた。

すぐ隣にあの少女が座って寝ていた。

パチン！

「気が付いた？」

彼女は目を開いて笑ってくれた。

その後、少女は色々の物を私に与えてくれた。

リントの使う食器の使い方、言葉、料理、洗濯など

他のグロンギ達には理解できない物だった。

1話：それから10年後

そして今では・・・・・・・・・

「フェイト、この後から最上階でロスト・ロギアの総合会議が始まります。お急ぎ下さい・・」

「ええ、解ったわガドル。ってあれ？いけない！！　資料の紙忘れ・・ってあっ」

目の前にそれをガドルは渡した。

「心配いりません。そんな事だと思い自宅から出る前に確認しました」

彼女の何時もの事を十分に予測していた。

「ありがとう」

「いいえ、それよりもお早く・・・」

ガドルは何時もフェイトの傍で行動していた。
そのせいか今ではフェイトになん癖着けていた上層部の連中も黙っていた。
ガドルの目から出てくる殺気により黙らず得ない状況だった。
しかし今回の会議は重要関係者だけっと言う決まりになっていた。
「ごめんねガドル此処で待っていて」
フェイトは彼に訳を聞かせた。
「しかし・・なら何かあったら言ってください」
ガドルは心配そうに言った。
「それじゃあ待っていてね」
彼女は会議室に入っていった。
会議室の廊下を立って待っていると体格の良い男と眼鏡をかけた女性と他の陸士も同行していた。
男の名前はレジアス中将でありその後ろの女性はオーリスであった。
レジアスは彼を見ると彼の所に歩いて来た。
「貴様はあの犯罪者の・・」

その言葉を終える間も無く凄まじい殺気を見せる。
しかしガドルはフェイトとの約束で絶対に手を出さないと言う約束をしていた。
それ以前に彼女の看板を汚さない様心がけている。
「何故？フェイト執務官に仕えている？貴様なら良い局員に成れるのになだったらウチに来ないか？お前の実力は私も評価するものだ」
二人は睨み合い周りは緊迫した状態が続いていた。
「お断りします。」
ガドルは、きっぱりと断った。
するとオーリスが口を開いた。
「き、貴様中将に何と失礼な言葉を！「よせ！」
レジアスは、オーリスを止めた。
「解った、しかし後から後悔するな！」
ガドル以外の者はこの場から去り会議室に入っていった。
ガドルにはフェイト以外の者に仕える気は無かった。
その後、会議が終わりフェイトに変な事されなかったか聞くと何も

無いと笑って答えてくれた。

仕事も終わり自宅に帰ろうと車に乗った。

ガドルが運転席にフェイトが助手席に乗ると・・・・

「あっ！そうだガドル少し寄りたい所あるんだけど良い？」

「わかりました。場所は？」

「この道を南西に行った方に施設があるのそれが・・・」

フェイトの口が急に止まった。

「どうかなさいましたか？」

不思議に何時もと違う。

「えっ！ううん何でもない車出して」

ガドルは、フェイトの言われた施設に行った。

到着した場所は古く警戒されている建物だった。

その中に入ったら一人の４，５歳の赤髪の少年が座っていた。

だが、少年の周りには結界が張られている。

しかも何重にも鎖が巻かれている。

「フェイトこの子は？」

聞くと口が重く開いた。

「この子は、エリオ・モンディアルって言う子で管理局が遺伝子操作で作らった子なんだ以前は家族と一緒に住んでいたんだけど管理局がその子を作ったと言う理由で無理やりこんな状態にしているの。」

ガドルはこの子の気持ちが解っていた。

自分も何も知らない幼い頃にグロンギに改造され改造されていた経験があったからだった。

「どうすればその子を此処から出せるんですか？」

「ガドル・・・？」

普段に見せない悲しい表情していた。

ガドルは少年の鎖を解こうとした。

周りの研究員達が駆け寄ってきた。

「き、君そんな事したらこの子の魔法の電気が来ちゃいますよ！」

するとフェイトが研究員達を手で止めた。

「以前話されていたこの子の身柄保証人になる話は私がなります」

研究員達も喜んだ。

「でも今この子の鎖をといたら・・・」

フェイトは笑いながら横に振った。

「それなら心配いりません、彼ならあの子をエリオに理解させられます」

ガチャ！

鎖を離すとエリオは怯えながら電撃を彼に放ったが彼は受けたままこっちに近づいて来る。

ガドルは上着の軍服を脱いでYシャツになった。

何度もエリオは彼に攻撃したが倒れないそして一歩先まで来てガドルは手を伸ばした。

エリオは手で頬を打たれるっと思い身を丸めた。

すると抱きしめた。

「大丈夫だお前を傷つけたりしない安心しろ」

「え・・？」

エリオがガドルに放った魔法はこの子の心の痛みだと感じていたからだ。

「ぼ・・僕は・・僕は・・・・うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんんん！！！」

安心したのか泣き出した。

エリオは彼らが来るまで孤独の暗闇の中にいたからだった泣き疲れたのかフェイトとガドルの傍からしがみ付きながら眠ってしまった。

それからガドルはエリオが管理局員に入ると言う言葉が来た時に彼はエリオの師匠になるのであった。

2話：脅威の戦闘力（前書き）

ガドルがシグナムと戦います。なのはにガドルが少し脅します。

2話：脅威の戦闘力

エリオが来てからの生活が変わった。

ガドルは、５：００に起きて顔を洗い運動着に着替えた。

そしてドアを開けると

「おはようございますガドルさん」

エリオがガドルと同じ運動着を着て外で待っていた。

「本当に良いのか？」

「はい！僕、フェイトさんやガドルさんの様に強くなりたいんです」

少年の目は真っ直ぐした物だった。

ガドルはため息を付いて決意を認めざる得なかった。

「わかった、なら森も中までウォーキングするぞ」

ガドルが走り出した。

「はい！」エリオは嬉しい笑顔でガドルの後ろから付いてきた。

そして目的地の森の中に入った。

するとガドルはいつも軍服の胸部の辺りにあるアクセサリーをエリ

オに渡した。

「これは？」何なのか解らなかった。

「これを持って魔力を込めろ」

エリオは言われるままにしたら。

ガチーン！「うわぁ！」

なんと槍に変形した。

「これなんて言うんですか」

「名前なんて無いお前が決めていい」

エリオは、少し考えて「ストラーダ・・」

「決めた今日からお前はストラーダだ」

エリオは嬉しそうに言うと

（よろしくなエリオ）

「うわぁ！シャ、喋った？」

「それは、元々私のだがフェイトが私の武器を知りたいと言い管理局の開発部でデバイスをこれだけ付けて貰ったんだ。さあ行くぞ！」

ガドルの身体が変化して行きカブトムシの怪人に変身した。

そして壊れかけていたグロンギのベルトも完全に回復していた。
ガドルは、胸に飾っているアクセサリーの一部を取るとエリオの持っている槍とは異なるのが出てきた。
ガドルは踏み込んだと思ったらエリオの手首を棒の部分で叩き持っている槍を地面に落とさせた。
「どうした？もう終わりか。」
エリオは、再び槍を持ち構えた。
「もう一度お願いします！」
次にエリオが動き始めガドルの槍と鍔迫り合いになった。
ガドルは槍の下方の刃の無い杖状の部分でエリオの左肩に当てエリオは地面に大きく転んだ。
はっ！と思いガドルがエリオに駆け寄った
「大丈夫か！」手を伸ばして起き上がらせた。
「少し休憩にするか？」
「はい・・」エリオは申し訳なさそうにしていた。
「なあ、エリオ・・お前は槍に才能がある。あの時お前に押されていたんだ」

「え？」

ガドルの目は真剣だったが優しさも入っていた。

「強くなっても私の様になるな」

その言葉を聞いた瞬間どう言う事なのか今は理解できなかった。

９：００フェイトと共に管理局に出所した。

私達の後ろから1人の女の声がした。

「フェイトちゃ～ん！」

彼女は駆け寄って来た。

茶髪のポニテールでフェイトと同い年の女だが私はこの女が何故か気に入らなかった。

「なのは」

彼女の名は高町なのはと言う管理局員で教官をしていた

「やっぱりそうだと思ったちょっと話があるからガドルさんも関わるから一緒に良いです？」

彼女はフェイトと9歳の頃からの幼馴染みだった。

彼女達はカフェテリアで座ったが私はフェイトの後ろで立っていた。

「あの・・ガドル・・さん・・？座らないの？」
私はこの女には警戒していつもならエリオと彼女だけの時は座っていたが座らなかった。
「いいえ、いつ敵が来るかわかりません私はこのままで良いです」
なのはも彼が苦手なのか反論してこなかった。
「ところでなのは一体なんなの？」
するとなのはは目の色を変えた。
「実はね最近発見されたロスト・ロギア「レリック」なんだけどその対応する課が出来るんだってそれで私はその人達に伝えるために来たんだけどフェイト執務官、ガドル氏にはこのレリックの対策課機動六課に来て欲しいのフェイトちゃんは私が担当する部隊「スターズ」の隊長と同じ「ライトニング」隊長に担当することになったからそしてガドルさんは隊員の強化訓練をする事なった私と一緒にしてもらうから私が教官でガドルさんが隊員の武器の指導でお願いします」
（この女何言っているんだ・・・私はフェイトにだけ仕えているんだぞ）
ガドルは、不満で仕方ないが言葉では言わない。
「ただし部隊はライトニングの部隊長補佐で副隊長とは別ですから」

なのはも彼が一筋縄ではいかない事をハヤテから聞いていたためハヤテは彼に任命を納得させるにはこの立場の方が良いと判断したからである。

彼女の話が終わるとまた後ろから声が聞こえた今度は「なのはちゃん、フェイトちゃんここにおったん？」

「「あ、ハヤテ（ちゃん）」」

茶髪で変な喋り方をする女の後ろには2人の女と1人の幼女、小さい妖精の女の子そして犬までいた。

「ひさしぶりだなフェイト・T・ハラオン、高町なのは。」

ハヤテの後ろにいた女の内一人が声をかけて来た。

その女はピンクの色の髪になのは同様に後ろに髪を縛っていた。

私とこの女が目を合わせた瞬間睨み合った。

彼女も負けない位の気配である。

「貴方がテッサロッサの右腕と呼ばれているガドル殿ですか？私は、シグナム。主ハヤテに仕える守護騎士の一人烈火の将です。よろしければ勝負してくれませんか？訓練場は今誰も居ませんので」

シグナムは、ガドルに試合を申し込んだが

「お断りします。私の戦いは見世物ではない、貴方方に不愉快にさせるだけだ」

彼には訓練で相手に教えるのは構わないが規則的な実戦や模擬戦が気に入らなかった。

そう彼の過去には多くの血が手に付いている様なものだ。

その過去を伝えたのはフェイトだけであった。

「何故ですか？私は騎士としての誇りを掛けて闘いだいのです！」

シグナムはどうしても彼と戦いだけであった。

ガドルが呆れて横を振った。

「シグナム・・誇りだけで戦っても残るのは虚しさだけですよ。私も昔なら君の誇りに泥を塗る真似はしなく闘いを望んだが、今はその行いの悔やむために償っているだけです。」

それでも彼女はお願いし続けた。

私はフェイトの顔を見ると苦笑いで頷いた。

「解りました、その誇りの為に戦いましょう」

シグナムは嬉しそうに「かたじけない」っと言った。

彼らはこの場を後にした。

後ろで幼女がもう1人の女に話しかけていた。

「大丈夫かシグナムの奴？」

「多分大丈夫よ」ニッコリ笑うもう1人の守護騎士泉の騎士シャマルであった。

魔法結界がされている草原に来た。

シグナムは首に付けていたペンダントを外し「レヴァンティン！！」

（了解マスター）

シグナムの局員の制服から鎧になりペンダントも剣になった。

ガドルも身体が変わってカブトムシの怪人になった。

ガドルは胸部に付けているアクセサリーを外すとレバスティン同様に剣になった。

シグナムの剣の刃が伸びて鞭状になって攻撃した。

「飛竜一閃！！」

ガシ！

しかしガドルはその攻撃を受けて鞭の様になった刃を左手で掴んだ通常は掴めないシグナムの剣裁きを軽々と掴んだ凄まじい瞬発力である。

シグナムは剣を動かそうとしても動かない。

そしてガドルはその掴んだ腕でシグナムとレバスティンを砲丸投げの様に回し始めた。

シグナムは、レバンティンを鞘に刺し込んだ。

シグナムもカートリッチ式を使った。

「くっ！ひ・・・火竜一閃！！」

バァンンン！！

鞭状の刃から炎が出てきて爆発した。

しかし・・・

「もう、終わりか？」

なんとカートリッチで攻撃しても傷一つ付いていない。

むしろ効いていないが正解である。

「今度はこっちの番です。」

右手に持っている剣で左手で掴んでいるレバスティンの刃を一刀両断で斬った。

「れ、レヴァンティン！！」

（システム・・・オ・・ーバーロード戦・・闘・・不・・・能・・・・）

シグナムは自分の相棒のデバイスを見続けた

ガドルは剣をこちらに向けた絶対ピンチの状況だった。

すると剣を元のアクセサリーに戻し人間体の姿に戻った。

「貴方の負けだ・・これで解ったでしょう誇りだけでは私に勝てない。以前の私なら貴方を殺していますよ」と言いフェイト達の元に行った

フェイトの前でしゃがんだ。

「申し訳ありませんフェイト。」

フェイトの前では反省の色を見せた。

すると幼女がガドルの胸倉を掴んだ。

「てめぇ！シグナムに！なんて事を！！」

ガドルはシグナムの相棒を半殺しにしたのと同様で許せないのであった。

「よせヴィータ！」彼らが振り向くとシグナムが寄って来た。

ガドルの目の前に来て御辞儀した。

「ガドル殿。御勝負ありがどうございました」

シグナムは今の勝負でガドルが余裕で加減してくれた事を悟った。
「ガドル殿の言うとおりあのままでしたら死んでいました」
それ以上シグナムは言葉に出さなかった
いや認めざる得なかった。
ガドルは自分よりも過酷な修羅場にいたと闘いで解ったからだヴィータは納得しないのかデバイスを構えたが。
シグナムに肩を叩かれ彼女はヴィータに向かって横を振った。
ヴィータも今の闘いで彼には一生勝てないと思いデバイスを解除した。
ハヤテはこの闘いで彼を是非とも機動六課に入れたくなった。
なのははシグナムに負けたら少し葉っぱを掛けようとしたが、それ以上に彼に対する恐怖感が生まれてしまった。
この世には自分より怒らせてはいけない存在もいると自覚した様だ。
するとガドルがこっちを見て言った。
「なのは貴方が管理局でエースオブエースと言われているがしかし私の今育てている少年なら貴方を１０分もしない内に勝つでしょう」
ガドルはそれ以上話さなかった。

3話：現在までの経歴（前書き）

ガドルさんを頭良くしました。

3話：現在までの経歴

ハヤテ達と別れた後仕事も終えて車に入るとフェイトが嬉しそうに車の中で話し始めた。

「ガドルありがとう、あの時シグナムを殺さないであの時した私の約束守ってくれて」

「私は貴方との約束もあの時の事も今だに覚えています」

「あの時のガドル本当に私の事信じてくれなかったもんね」

今から数年瀕死のガドルを拾って戦艦アースラに帰還して養子になった義理の母と義理の兄に事情を話したらその場で彼の取調べをしようとした・・・・

「ちょっとまって兄さん！！」

「そこを退くんだフェイト！見知らぬ相手を調べるのも管理局の義務だろ」

クロノが彼にする拷問はフェイトも知っていたからだった。

フェイトは咄嗟に彼の盾になった。

「じゃあ私もプレシア・テッサロッサの娘だよ彼に酷い事するなら私からやって！！」

クロノはフェイトに説得しようとしたが聞いてくれなかった。

クロノの後ろから彼の母がクロノを止めた。

「やめなさいクロノ・・・フェイトそれじゃあ彼の疑いが晴れるまで貴方が面倒を見なさい」

クロノの母リンディはフェイトにウィンクしてクロノを押して部屋から出て行った。

ウィーン！

翌日フェイトは彼の部屋のロックを解除して開けて入ると彼がいない後ろを振り向くとガドルが後ろから襲い掛かった。

床に転がり仰向けのままフェイトの首を締め付けた。

しかし彼女は抵抗しないそれどころか死の恐怖すらも無かった。

（大丈夫・・・私は貴方になにもしないよ）

彼女はガドルに念話してきた。

「ボ　パ　ブ　バ　ギ　ボ　バ　？リント　ン　ル　グ　レ・・」

（怖くないのか？リントの娘・・）

（うん・・私・・・本当の母さんにこれよりも酷いことされたから）

彼女はそれどころか悲しい表情を見せた。

ガドルは手を離しベットの隣で座った。

すると彼女は片手にある物を持っていた。

スケッチブックとマジックペンである。

それを見て警戒した。

リントの新しい兵器か？と言う警戒だ。

しかしこれはそう言う物でなく彼女はその本を開くとその黒い棒で何かを書き始めた。

「これが私の名前・・・フェイトだよ、フェ・イ・ト」

これが彼女の名前だと理解したのか。

口が開いた「ガドル・・・」

「えっ！ガドル・・・？」

それから私はフェイトの教えてくれた事を次々に上達していった。

その度に彼女はまた違う物で私にこの時代の知識を授けてくれた。

そればかりか気付くと彼女よりも知識が豊富になりリント達の学校の最後に行くダイガクっと呼ばれる場所でハカセゴウっと言う物をいきなり取ってしまうとフェイトが何故か喜んだ。

これをきっかけにフェイトはガドルに執務官の勉強を教えて貰った。

しかし1，2回目の試験では兄に教えてくれたがその教え方がフェイトには理解できない物だった

「だから此処を×っと・・」

ガドルはクロノの教え方はあまりにも下手だと思った。

その度にフェイトに解らない所を教えてくれっと迫り来るが「僕が教えるから引っ込んでろ！」っとあのシスコン男は私に警戒していた。

私は別にコイツが如何なろうっと構わなかったが手を出すとフェイトが悲しい顔をして来るのでやらなかった。

それにアースラから出るまでにフェイトにあの約束をさせられたか

らである。

「ガドル良い？これから新しい自分に成るんだから絶対に人に手を出したか駄目だからね」っと言うものだった。

そしてクロノがフェイトの部屋から出るとフェイトは私に縋り付いた。

「ガドル～お願い！兄さんから教えてくれた所全然解らないよ～！！」

確かにあの教え方ではフェイトは到底理解できない物だった。

「なら・・わた「駄目だ！！」

私達は振り向くとドアにはあのシスコン男がデバイスを構えていた。

これが1，2回目の執務官試験の勉強では落ちるのは明白であった。

そして3回目の試験ではシスコン男が提督に昇進してから結局私が最初から教えていれば良かったのだと思う何故なら私が教えた瞬間に直ぐに合格したのであった。

それは、フェイトが13歳の時に既にハカセゴウっと言う物を取っていたからであった。

それから今の様な関係になっていた。

車でフェイトが今までの思い出を話しているとフェイトのカバンから写真が私の運転している腿の辺りに落ちてきた。

「フェイトこの子は、この間話していたルシエ族の巫女の血を引く子ですね」

「うん、この子の身柄保証人は私が成る事になるの」

家に着いたらエリオが外で待っていた。

「お帰りなさいフェイトさんガドルさん。」

車を止めると直ぐにエリオが来た。

「早速なんですがガドルさん練習お願いします」

エリオの服は朝来ていた運動着だった。

「エリオ、ガドルは今日一日忙しかったんだから今日は良いでしょ？」

エリオはガドルがそんなに暇じゃない事は理解していた。

しかし「フェイト私は大丈夫です。さあ、練習するかエリオ！」

エリオはその言葉を聞いた瞬間目が輝いていた

「はい！お願いします！」

フェイトはこの二人がまるで親子の様に見えた。

そう！まるでキャッチボールに付き合う父親と子供の様に・・・・・

その練習は夜の７：００まで続いていた。

4話：閣下！？（前書き）

ガドルさんとなのはが戦います。

4話：閣下！？

数ヶ月後フェイトと共にレリック対策の課が作られたと言う事を聞いてエリオとフェイトと一緒に来るまで来た。

その中央の広場では、機動六課のメンバーが集まっていた。

私はフェイトと一緒に他の隊長たちと並んでいた。

そしてハヤテの話が始まった。

「こんにちは、長苦しい話は嫌いなんでこれから1年間お願いします」

挨拶が終わり部隊長や副隊長の紹介が始まった。

そして私の番になった時にみんなが、動揺した。

なんたって彼の服装は管理局の制服では無かったからである。

さらにレジアス中将の言うことを聞かない賊容疑もかけられていたからだ。

「え～ガドル武装指導官は、スターズとライトニングの3，4の指導を担当になり高町一等空尉と共に教えることになります」

ハヤテがその言葉を発するとさらに動揺した。

それから、ガドルは高町と共に新人フォワード達の指導に当る事になった。

ガドルはフェイトに頼まれた事を思い出した。

「ガドル私が居ない間エリオ達を頼んだよ」

そう彼女と同行できない時はいつもエリオ達を見守る様に言いつけられていた。

「フェイトがそうおっしゃるのでしたら」

ガドルは、なのはと共に訓練場に行きエリオ達が並んで待っていた。

「それじゃあ、行き成りだけど訓練始めようか」

フォワード達もやる気に溢れていた。

「この訓練所を私に攻撃を当ててね。もしも出来なかったらペナルティーでもう一度するから」

始めようとした瞬間「お待ちください高町教官」。

フォワード達がガドルを見た。

「経験の未だの彼らにいきなりの貴方を戦わせるのは無理があります」

彼女には、以前のシグナムを簡単に倒してしまう実力を持っていたので反論できなかった。

「ガドル武装指導なにが言いたいのですか？」
なのはは、彼のやり方が気に入らなかったが彼の意見も聞くの良いと思った。
「一度私と実戦しませんか？」
エリオ以外のフォワードは驚いた。
（ガドルさん何をするきなんだ？）
エリオは彼の実力を知っていた。
今なら何分の経たない内に倒すと思ったからだ。
「解りました。勝負します」
なのはも彼を実戦で屈服させたくて仕方なかった。
「レイジング・ハート！セットアップ！！」
服装も変わり白い魔導着になり杖が出てきた。
ガドルも皮膚が変わりカブトムシの怪人になる。
エリオ以外のフォワードはガドルの変身に驚いた。
ガドルとなのはのいるフィールドが廃墟の町になり戦いがはじまった。

なのはが空中で飛び別の魔方陣が出てきた。

「アクセル・シューター！！」

それを連続でガドルに放った。

それも当然で彼を早く倒さないとシグナムの似の前に成るからだった。

そして剣などの接近武器が当たらない様に強力なプロテクションを常に、使っていたからだった。

それを持続的にすると相当の疲労が来るのを経験していたからだ。

さらに少し替え玉を用意したピットも彼女が変身した瞬間に隠れて現れていた。

その事は彼は知らないと把握していたからである。

ガドルは剣に成るアクセサリーを手に持ち剣にしてなのはの攻撃を斬ってかわしていた。

すると、なのはの周りには光る球体が数個にもなっていた。

「クロス・ファイヤー・シュート！！」

ドガンンンン！！！！

煙が経ちこんで来た。

それでも、なのはの攻撃は止まなく次の魔法に準備をする

見学していたフォワード経ちは・・・・

「ちょ、ちょっと今ので闘いが終わったんじゃないの？」

その声はスターズメンバーのティアナ・ランスターである。

「いいえ！まだガドルさんは倒れていない所かなのはさんの攻撃に当たっていません」

エリオがそう言うと他のメンバーは驚いた。

「あ・・あれでも当たっていないのエリオ君？」

エリオの隣にはキャロ・ル・ルシエが質問してきた。

「うん！なのはさんの攻撃が当たる瞬間余裕で剛力体から俊敏体に変ったから」

スバルがエリオに問いた。

「じゃあ、ガドルさんはその他にも変形できるの？」
「はい、僕に教えてくれたのは電撃体と剛力体、俊敏体、射撃体の他にも後５つあるって言っていました」
「「「「え～～～～！！」」」」
つまりガドルは後５つも切り札が残っているのにも関わらず余裕なのはみんな驚いた。
一方なのはが次の攻撃を放った。
「ディバイディング・バスターァァァァァ！！！！」
ドカアアアアン！！！
放ったとき「何処を見ているんですか？」
なのはが後ろを振り向くと空中にガドルが立っていた。
「？？！！」
誰もがいつの間にか地上にいたガドルが空中にいる事になのはの背後からいた事は、今気付いたのだ。
「スター・ライト・ブレイカーァァァァァ！！！！」
そして隠れていたピットでもう一つのチャージを終えて地上から空中に攻撃した。

ピュン！！　　ドーオン！！！

攻撃が当たると思いきや持っていた剣が行き成りボウガンに変わってなのはの必殺技を貫いてピットも破壊された。

それを見ていたフォワードは目を疑った。

「「「あのなのはさんの必殺技をたった一つのボウガンで無効にしてしまうなんて・・・・」」」予想もしない事が今に始まった。

結局なのはは、ＳＬＢで全部の魔力を使い果たしたのか気絶してしまった　。

これにより今日の訓練は終わってしまいそれを見ていたフォワード以外の者達の間ではガドルを「閣下」や「戦う甲戦士」と呼ばれ恐れ敬われた。

5話：教育（前書き）

ティアナがホテル・アグスタで失敗してからガドルと勝負して励まされます。

5話：教育

ある日の事だった。

その日任務の帰りにティアナが茂みで泣いていた。

声を出そうとした時スバルが私の肩を叩き横を振った。

理由を聞くと彼女は任務中にミスしてスバルに間違って当たりそうになった時にヴィータがぎりぎりでスバルをガードして現場から外されてしまった。

そもそも彼女がこんなに強さに拘るのには訳があった。

それは任務中に死んでしまった。たった1人の兄ティーダ・ランスターの無念を晴らすために彼の出来なかった執務官になろうとしていたからである。

その夜ティアナは夜遅くまで自主練をしていて声をしていた。

「その位にしておけ」

彼女も私の声が聞こえて振り向いた。

「何のようですか？」

「失敗したんだってな」

その言葉を聞くと彼女の瞳に鋭さを増した。

「話はそれだけですか？今集中しているので話しかけないでください」

そして始めようとした時・・・・

ガシ！

ティアナの細い腕を掴んだ。

「は、離して下さい！！」

「ならば、私と勝負しないか？」

「え？」

彼女はガドルの言葉に予想もしていなかった。

ガドルは変身して瞳を緑色にしてなのはの時に使ったボウガンを出してきた。

場所を茂みから訓練所に移った。

ティアナもデバイスでバリアジャケットになり訓練場に戦いの舞台が始まろうとしていた。

ティアナは魔法の砲撃でガドルを撃った。

しかしガドルにはそれをかわすと予想して空中に飛んで幻術を使ってガドルを錯乱させようとしていた。

予想通りガドルはこの攻撃を避けて空中にいるティアナを撃つ位置に居ること気付いたのかその幻術に戸惑ったがガドルの射撃体にはクウガと同じ能力が備え付けられていた。

その能力は視覚や聴覚などを極限にする物だった。

そしてティアナの本体が空中にいない事に解り此処からガドルに撃ちやすい方にいると悟った。

それはわざとビルの背景に溶け込んでいた事に発見した。

そして近づいて来たティアナはデバイスの銃の先を刃物に変形させていた。

ガシッ！

後一歩の処でガドルの２つの指で真剣白刃取りをされた。

「良い判断だ。筋も良い」

ガドルに受け止められたのかティアナはバリアジャケットを解除した。

そしてティアナはいきなり笑い出した。

「ガドルさん・・天才ですね」

「天才？・・おい！それは違う。その言葉は昔の負け犬が作った言葉だ」

ガドルはティアナから落ちたデバイスをティアナに渡した。

「だが・・・俺達は違う。立て！お前は一歩ずつ歩いて行かないといけない」

ガドルは彼女に手を貸して部屋まで連れて行った。

翌日八神ハヤテのいる仕事部屋に訪れた。

「八神１佐、話があるのですが宜しいでしょうか？」

ハヤテは朝早くに訪れたガドルに驚いた。

「で、何の用なん？」

「はっ！先日のティアナ・ランスターの件なんですが今の状態では彼女は一歩も成長しません。それで提案なんですが・・・１ヶ月間、私にティアナ・ランスターを預けて頂けませんでしょうか？」

ハヤテは更に驚いた。

ガドルはフェイトの為だけに行動する男のはずだったがいきなり新人フォワードの修行させてくれと頼む彼を見て戸惑っても仕方ないのであった。

「で？修行の場所は決めたん？」

「はい、私の経験上で場所は決まりました」

ハヤテは無言のまま考えて口を開いた。

「解りました。機動六課部隊長八神ハヤテその申し込みに許可します」

「ありがどうございます」

ガドルは頭を下げて礼を言ってこの部屋を後にした。

6話：修行1

朝の練習が終わりガドルは、なのはに伝えてきた。

「高町教官、失礼は十分承知なのですが、これからティアナを修行させにこの世界から離れます。どうかご理解ください」

その時ハヤテが現れてなのはの方に向かった。

「なのはちゃん！ちょっと良いかな？実はティアナの事なんだけど・・「今ガドルさんから事情を聞いたから大丈夫だよ」・・へっ？」

なのははニッコリだったがその目は笑っていない。

何たって最初の日にガドルに半殺しの目に遭わされておまけに自分の育てているティアナを連れて何処か解らない処で修行だと言われて不満だが彼にその事を言えば今度こそ命は無いと思ったからだ。

「ところでガドルさん？場所は何処で？」

なのはも場所さえ解ればそこに行って一緒にティアナに教える事も出来たが

「残念ですがお教えすることは出来ません」

彼の目から聞くなオーラが立ち上っていた。

それはきっと暗黙の了解と言う奴であった。

相当他の人には行かせたくない場所であると思ったからだ。
ガドルはそのままティアナの方に向かって行った。
「あ、ガドルさん。昨日はありがとうございます」
ティアナはお礼を言って答えた。
「さそく何だがこれからお前だけ私と修行に行くことになった」
「えっ？」
彼女は目を丸くした。

こうしてティアナは荷物をまとめ出発の準備を終えガドルにしたくが出来た事を告げた。
するとガドルは地面から魔方陣を書き始めた。
「ティアナ、この魔方陣に入れ。」
ティアナは言われるがままに従った。
すると魔方陣が銀色に光りだした。
「フェイト少し留守になりますがお体には気をつけてください」
フェイトは笑いながら頷き手を振った。

そして彼らはこの場から消えた。

なのはは・・・

「レイジング・ハート、ティアナのクロスミラージュの追跡を」

（了解マスター）

そして数分後・・・

「どうだった？」

（すいませんマスター。どうやら彼らが入っていった魔方陣は極めて特殊な物でその魔方陣が書いた人の魔力が解除しないと発見出来ない物のようです）

「何ですってー！！」

またもガドルに一杯食わされてしまったなのはであった。

ティアナは魔方陣から目にした物は木々が生えている樹海の中だった。

「ここは・・・？」と聞くとテントを作っていたガドルに問いた。

「ここは、私の種族グロンギのいた樹海だ」

「グ・・ロンギ・・？」

「戦闘民族の名前だ」

テントが作り終わるとティアナを私の前に立たせた。

「いいかこれから行う修行は・・・」

ティアナはやる特訓はなのはのよりも厳しい物と考えていたが・・・

「これから練習もデバイスを使うのも禁止する、一ヶ月間この拳銃だけでいろ」

「へ！？えっ～～～～～～！！ど、どう言う事ですかぁぁぁ！？」

「ん？言ったとおりの意味だ」

ティアナは、ガドルの教える事が分からなかった。

7話：修行2（前書き）

ティアナは、孤独じゃないと仲間がいる事にガドルに教えられます。

7話：修行2

「良いか？魚の流れをよく読めゆっくりと。」

そう言いガドルは、川辺で素手を使い魚を取っていた。

（ガドルさんまるで熊みたい・・・ってガドルさんカブトムシなんだけど！）

そう思い自分で自分を突っ込むティアナであった。

ガドルが自分以外の魚を持ってテントの近くに作った焚き火で焼いていた。無論ティアナの分もだ。

「おい！そろそろご飯にするぞ。」

ガドルが食べるのを誘ったが

「いいえ！自分のは、自分で取ります！！」

ティアナは、ムキになり銃を闇雲に撃っていた。

ピュウ！

「はっ！？」

ティアナは、気配を感じて振り向いても誰も居ない。

奥でガドルが魚を焼いている。

それを見て自分の勘違いだと思っていた。

そして日も暮れてきた。

それでもティアナは、休まない。

そして・・・・・

バタン！

ティアナは、膝を地面に下ろした。

「どうして・・・・？どうしてあたしは出来ないのやっぱり凡人のあたしには出来ない事なの・・・・」

ぽろ・・ぽろ・・

ティアナの目尻に涙が溜まっていた。

「ティアナ・・・・少し話そうか・・・・」

ガドルに呼ばれてティアナは、戻った。

ガドルは、ティアナのこの重い空気をどうにかしないとこれからの彼女の将来に関わると思い自分の昔の話をした。

「そう悔しがるなティアナ。私の若い頃は、お前より無茶をした。」

そう言いガドルは、昔の話をした。

「ガドルさんが！？」

ティアナは、驚いた。

「ああ、私は、何でもできると思い何時も無茶して失敗した。」

ティアナは、信じられなかった。

「私だけじゃなくてガドルさんもですか？」

ガドルは、微笑みながら頷いた。

「そうだ・・・もしかしたらお前以上だったかもしれない。アノ頃は、何も知らない子供当然だったからないつも長老達に怒られていた。」

ティアナは、何故か自分の過去を真剣に聞いていた。

「何で変わったんですか？」

ガドルも冗談で自分の過去を言った筈がティアナは、こっちの目を見て話して来た。

「まあ、フェイトに出会ってから今までの私が変わったと言っても言いぐらいだ。」

「え？フェイトさんが？」

ティアナは、そう呟いた。

「そうだ。私は彼女と出会うまでは今とは、違う世界で暮らしていた。」

「違う世界？」

ティアナは、不思議そうに言って来た。

「彼女と出会うまでの私は、人を殺す事に楽しみを感じていた。」

ティアナは、ガドルの話を聞いて驚かずに得ない状況だった。

「私は、何も知らない子供当然だったのかもしれない。」

「え？」

ティアナもどう言う事なのかわからない。

ガドルから驚異の事実が出る事は、ティアナも知らなかった。

（信じられない・・・あのガドルさんにそんな辛い過去があったなんて・・・）

普段何も無口な彼から知るのは、覚悟もいる。

「ティアナ。お前には、私よりも沢山良い物を持っている。」

「何なんですか？」

ティアナは、ガドルの言葉が今だに理解できない。しかしそれでも

彼女は、彼の話で何か出口の様な物があると確信した。

「仲間だ。」

ガドルの答えは、簡単で真実的な言葉だった。

「お前は、みんな自分で背負っているが違う。全て自分で解決するのは、無鉄砲だ。だが仲間が居ればお前の能力は、今まで以上に上がるんだ。」

ティアナは、ガドルの言葉を聞いた瞬間涙が溢れ出した。

「私って馬鹿ですね・・・気付いていない所でこんなにも誰かが支えていたなんって・・・・」

ポン！

ガドルは、ティアナの肩を軽く叩いた。

「さあ！特訓するんだろ？」

「はい！」

ティアナは、自分の行った行動を反省して川辺に戻った。

「（そう言えば・・ガドルさんが「川の流れを魚の動きをよく読めゆっくりと。」って言っていたけど・・・）」

ティアナは、目を閉じた。

チャプン・・・チャプン・・・

「（そうだ・・魚の音や川の流れの音を呼んであたしが攻撃出来る範囲で行動すれば良いんだ・・・）」

ピィチャ！！　ピク！！

「（そこ！！）」

バン！！

ティアナは、銃で撃って目を開くと魚が沖で跳ねていた。

「で・・出来た！・・はっ！！」

ピュ！　スタ！！

ティアナは、後ろから気配が襲おうとして回避した。

そこには、変身したガドルがいた。

「その感覚、忘れるな・・・」

ガドルは、変身を解いてテントに戻った。

つまり、ティアナが来た時から感じていた気配は、全てガドルがしていた事になった。

「ありがとうございます！ガドルさん！！」

ティアナは、お辞儀をしてガドルが今まで自分を訓練する為にした事と同時に自分を支えてくれた事に始めて気付いた。

オリジナルキャラクター紹介（前書き）

久しぶりにこの作品を書きたくなりました。

オリジナルキャラクター紹介

ズ・ゼルグ・バ

性別：男

モチーフ：ギャラファオオクワガタ

形態：剛力態・重撃態

ゼルグは、聖王教会のカリムが聖王の扉と呼ばれるアイテムを偶然開けてしまい。カリムは、霊石が不完全で倒れていたゼルグを治療した事で彼は、カリムの専属のシェフに成る。シスターシャッハと戦った時は、二刀の大剣を自在に操る剛力態と重力を活かした無手の形態：重撃態を使いこなす。

ゼルグは、主の命令を尊重しますが時にしてアドバイス的な物でカリムを導きます。

それからの話は、小説を読んでいくとわかります。

8話：聖女と戦う料理人（前書き）

久しぶりにこの作品を書きました。※残酷なシーンも在りますがなるべく抑えたのでご理解ください。

8話：聖女と戦う料理人

聖王教会は、このミットチルダの宗教の本部でもある。

「ヒック・・・ヒック・・・・」

聖王教会の統括室では、一人の女性が泣いていた。

女性は、黄金に輝く長い髪と翡翠の瞳をしていた。

「神よ・・・何故弱き者を救わないのですか・・そして私は、こうも弱いのですか・・・・」

女性は、自分の弱さを恨んだ。

それは、女性を慕っていた子供達が管理局の施設に連行されてしまった。

子供達は、普通の魔導士よりも強く様々なレア魔法スキルを所有していたからだった。

「お止め下さい！」

女性は、子供達を連行する管理局の科学者達を説得しようとした。

「騎士カリム。もしも邪魔をする様ですと、貴女だけでは無く教会の者達も反逆罪で捕らえる事に成りますよ？」

子供達を連行しようとする初老の男が不気味に笑った。

［カリムさま！助けて！助けてぇ！！］

連行される子供の一人にカリムに甘えてくる子供が叫んだ。

［そうなれば、貴女の義理の弟も査察官の職を失う事に成りますよ？］

ビクッ！

カリムは、今まで一緒に居た弟の夢だった査察官の職を失う事を恐れた。

あんなに査察官の職を小さい頃から憧れていた弟を不幸にする事が出来なかった。

［っ！］

ポロ・・・ポロ・・・

カリムは、涙ろ流しながら何も言わすに居ると科学者達が子供達を連行して行った。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

カリムは、何度も何度も謝った。

キイィィィン！

「？」

カリムは、机の引き出しから何かが光輝いていた。

ガラッ

引き出しを開けると光り輝く鍵があった。

「これは・・・・？」

カリムは、思い出した。

先代の亡き騎士から貰った聖王の扉の鍵だった。

先代は、息を引き取る時にカリムにこの鍵を渡した。

「カリムよ・・・もしも・・・何かあれば、迷わすにこの鍵の示す聖王の扉を探すのだ・・・良いな・・・」

先代は、管理局の理不尽さを感じて聖王教会に密かに伝わるロスト・ロギア：聖王の扉の鍵をカリムに渡して息を引き取った。

カリムは、藁にも縋る気持ちで鍵の導くままに扉を探した。

「此処は？」

カリムが辿り着いた所は、教会の庭の噴水だった。

キイィィィン！

ゴッゴッゴッゴッ！

噴水が動き出して止まると噴水の中央のオブジェから入り口が現れた。

カリムは、怖くて行けなかった。

［カリム様！］

カリムは、自分を慕ってくれた子供をどうしても助けたかった。

（子供達を助けるのならこの命悪魔にでも捧げる！）

カリムは、勇気を持って入り口に入って行った。

入ると真っ暗い通路が続いていて先に一歩一歩進んだ。

ピカァ！

通路を抜けると光るレンガで出来た部屋が存在していた。

その中央に扉が存在していた。

「これが聖王の扉・・・」

カリムは、駆け寄って扉の鍵口に鍵を挿入した。

ガララ・・・

扉が開いた。

ズシン！

扉の奥から何かがカリムの方に進んで来る。

ズシン！ズシン！

奥からクワガタの怪人が遣って来た。

ピタッ！

カリムの目の前に来ると止まった。

「貴殿が新しい主か？」

クワガタの怪人がジーッっとカリムの目を見ながら聞いた。

「あ・・貴方は、一体？」

カリムは、困惑した様子でクワガタの怪人に聞いた。

「我の名は、ズ・ゼルグ・バ。理由あってこの聖王の扉の次元で眠りについていた者だ。」

ゼルグは、堂々と名乗った。

「主？」

「いかにも。主の命なら何なりと！」

ゼルグは、迷いの無い目でカリムを見た。

ポロ・・・ポロ・・・

カリムの目から涙が零れ落ちた。

「!?主よ!我の挨拶に不愉快にでも成されましたか?」

ゼルグは、心配した口調でカリムを慰めた。

「・・すけて・・お願い!助けて!子供達を!」

カリムは、何度も『子供達を助けて』と言いゼルグに頼んだ。

「主よ。理由を言って下さい。」

「実は・・・・」

カリムは、理由をゼルグに全て話した。

「成る程・・・」

ゼルグは、考え込んで頷いた。

ザッ!

「解りました!主は、部屋で待っていてください!」

シュッ!

ゼルグは、この場から去った。

管理局の施設では、武装局員達が門番をしていた。

ズシン！

「！？」

「何者だ！？」

武装局員達がデバイスを構える。

「動くな！武装を解除し・・スパッ！ブシャァァァァ！！

ゼルグの持っている双剣が武装局員達の体を真っ二つにした。

ズシン！

ゼルグの鎧の様な体が管理局の施設の中に入って行った。

施設の中では、研究員達が子供達に妙な装置を付けていた。

「助けて！」

「怖いよぉ！！」

子供達は、泣き叫んでも研究員達は止めなかった。

「フィッフィッフィッ！君達は、科学の礎と成るのだ！」

研究員の中で一番偉い研究員が不気味に笑った。

「さって始めようか！」
研究員が装置のスイッチを押そうとした。
ジリリリリ！！
施設の中から警報音が鳴り響いた。
「何事だ！？」
「侵入者です！セキュリティーと糸も簡単に突破して行きます。」
セキュリティーのモニターを監視していた研究員が伝えた。
ドシン！
壁が壊される音がした。
研究員達は、壊された壁の方を見るとゼルグが居た。
ブン！ブシャァァァ！！
研究員の一人の首筋から血が出てきて倒れた。
「ぎゃあああ！！」
「逃げろ！」
研究員達は、研究室の出口に向かって逃げた。

スパッ！ブシャァァァァ！！
ゼルグは、瞬時に回りこんで研究員達の体を双剣で四散した。
「動くな！」
「！」
振り向くと研究員が子供達に銃を向けていた。
「動けばモルモット達が死ぬぞ！」
ゼルグは、動けなかった。
「僕達に構わずにこの人を倒して！」
子供の一人がゼルグに言った。
「！」
ゼルグの中の心の金銭に触れた。
「う、うるさいぞ！ガキが！」
研究員が子供に銃を発射しようとした。
「良い心掛けだ！だが、我は今も光り輝こうとする小さな命の為に

助けよう！はぁ！」

ブン！ブシャァァァァ！！

ゼルグは、片手に持っていた双剣の一つを研究員の銃を持っている手を投げて切断した。

「ぐあああああ！！」

研究員は、斬られた手を押さえた。

ガシッ！

ゼルグは、研究員の頭を片手で鷲掴みした。

「た・・助けてくれ・・・」

研究員は、ゼルグ助けを求めた。

ギリ！

「ぐあああああ！！」

ゼルグは、掴んでいる研究員の頭に強く握った。

「ならば、貴様は子供達の命を散らそうとした。この罪は、万死に値するものだ！」

ゼルグは、睨んだ。

「ば・・化け物・・・」

「貴様の方がよっぽどの化け物だ！」

グシャッ！

ゼルグは、研究員の頭を粘土を潰す勢いで潰した。

スパッ！

ゼルグは、子供達の装置で縛っている物を斬った。

「さあ、もう安心だ。」

ゼルグは、双剣を消した。

「お前達、此処に来るんだ。」

ゼルグが言うと子供達が集まった。

ゼルグは、次々と子供達を抱きかかえる。

「しっかり掴まっていろ。」

シュッ！

ゼルグが言うと素早く施設から去った。

「みんな・・・」

聖王教会のカリムの部屋では、子供達の無事を祈っていた。

「カリムさま！」

カリムの部屋から聞き覚えた声がした。

「カリムさま！」

振り向くと子供達が居た。

「良かった！良かった！」

カリムは、子供達に涙を流しながら駆け寄った。

「主、ただいま戻りました。」

グラサンを付けた３０代位の男が立っていた。

「ゼルグなのですか？」

コクリ

ゼルグは、頷いた。

「では、後ほど。」

ガタン

ゼルグは、カリムの部屋を後にして残り仕事に向かった。

翌朝、聖王教会に管理局の上層部の人達が訪れてカリムに謝罪をした。

カリムは、以前は偉そうにしていた管理局の上層部の人達が態度を変えた事に不思議に思えた。

「あら！」

カリムは、良い匂いがして来た事に気付いた。

厨房の方から匂いがする。

ガチャッ！

カリムは、厨房のドアを開けるとゼルグがコックの服装をしていた。

「こんにちは、主。いかがしましたか？」

ゼルグは、カリムの方を振り向き挨拶をした。

「ゼルグ？何をしているの？」

「料理です。」

「えっ？見れば解るけど何で料理を？」

「人は、イライラした時や深刻な時にも料理を食べれば気分が少しは良くなるからですよ。」

ゼルグは、正直に答えた。

「カリムは、料理が出来るまでお部屋でお待ちください。」

「ええ。そうするわ。」

カリムは、ゼルグの言う事に従って部屋に戻った。

昨日の夜に子供達を救出した後にゼルグは、グロンギ形態で管理局の上層部の人達の自宅に駆け込んで来て［子供達を実験台にするな…］管理局の上層部達は、ゼルグの鬼神の様な威圧感に屈してしまい次の朝聖王教会のカリムに謝罪に来た。

「カリム。」

部屋からショートカットのシスターが来た。

「シャッハ、どうしたの？」

「あの男は、何者でしょうか？」

「あの男？」

「今、厨房で料理をしている男です。」

カリムは、自分がゼルグの封印を解いた事を黙っていた。

「いいじゃない。根は、悪い人ではありませんよ。」

「カリムがそうおっしゃるのでしたら良いのですが。」

シャッハは、不安そうだった。

コンコン！

部屋のドアからノックがした。

「どうぞ。」

ガチャッ！

ゼルグがやって来た。

「料理の支度が出来ました。」

「解りました。」

ゼルグ達は、食堂に向かった。

食堂に着くと綺麗に盛り付けてされていり料理が並んでいた。

カリム達は、席に着くとお祈りが始まって終わると「いただきます」と一同が料理に手を伸ばした。

パクッ！

「美味しい…」

一同は、ゼルグの作った料理を絶賛した。

「ゼルグ、美味しいわ。」

「ありがとうございます。主。」

ゼルグは、照れ臭そうに言った。

8話：聖女と戦う料理人（後書き）

次回は、ガドル閣下がミットチルダにティアナと共に戻って来る話しです。

9話：料理人と閣下が出会いました。（前書き）

お久しぶりです。いよいよ閣下と料理人が出会います。

9話：料理人と閣下が出会いました。

聖王教会に客人が来日した。

「カリム、お久しぶう。」

来日した客人は、起動六課の八神ハヤテだった。

「待っていたわハヤテ。お久しぶり。」

カリムは、統括室の席から立って挨拶をした。

「起動六課の件よね。」

「まあ、そんなとこや。後でフェイトちゃんも来るさかい。」

ハヤテは、客人用の席に座るとカリムも客人用の席に座った。

コンコン！

部屋のドアからノックがした。

「どうぞ。」

ガチャッ！

ドアからゼルグがコック姿でお菓子とお茶を御盆に乗せて部屋に入った。

「主、お茶とお菓子をお持ち致しました。」

ゼルグは、客人用のテーブルに手際良くお茶とお菓子を運んだ。

「ハヤテ、紹介するわ。此方は、最近料理人として雇ったゼルグよ。」

カリムがコック姿のゼルグを紹介した。

「ゼルグと申します。宜しくお願いします。八神殿。」

ゼルグは、ハヤテに挨拶をした。

「お茶を飲みながら話しましょう。」

カリムは、ゼルグの作ったお茶を幸せそうに飲んだ。

ハヤテもお茶を飲んだ。

「っ！これ美味しいわ。」

ハヤテは、ゼルグの作ったお茶のお湯の火加減やお茶の種類を真剣に選んでいる事に驚いた。

「アールグレイね。」

「はい。」

カリムがお茶を聞くとゼルグは、頷いて答えた。

「お菓子のケーキは、モンブランです。」

ゼルグは、モンブランを食べやすい用に包丁で切った。

カリムとハヤテは、モンブランを口の中に入れた。

「甘さ控えめでまろやかや。」

「ええっ。女性の体に良い様に工夫しました。」

カリムとハヤテは、ゼルグの作ったケーキに大評価した。

コンコン！

「どうぞ。」

カリムがドアからのノックに気付いた。

「久しぶりねカリム。」

フェイトが入って来た。

「あら、久しぶりねフェイト、ガドルさん。」

フェイトの背後には、ガドルも居た。

コクン

ガドルは、頷いた。

「こんにちは、お初にお目に掛かります。ゼルグと申します。」

「初めまして、私はフェイト・T・ハラオンです。此方は、ガドルです。」

フェイトがゼルグにガドルを紹介した。

ゼルグは、ガドルの前に立った。

「よろしく。」

ゼルグは、ガドルに握手を求めた。

ガドルも無言で握手した。

ガシッ！

「！」

ガドルは、ゼルグ握手をして目の色を変えた。

ゼルグは、握手すると映像で自分のグロンギの姿の幻を見せた。

「ガドル？ガドル！？」

「っ！フェイト？どうしましたか？」

「どうしたのって行き成り動かなくなったから心配したんだよ。」

フェイトは、心配そうな顔で見ていた。

「少し、外に出ています。」

「えっ？うん。わかった。」

ガドルは、部屋を後にした。

「では、我も少しこの場を外させてもらいます。」

ゼルグも部屋を出た。

「ゼルグさぁーん！」

「ヴィッツ！シェフと呼んでくれ。」

ゼルグが休憩をしていると子供の一人：ヴィッツが来た。

「僕にもケーキの作り方を教えてよシェフ。」

ヴィッツは、ゼルグにケーキの作り方を教えてくれる様に頼んだ。

「では、作るか？」

「うん！」

ゼルグは、ヴィッツを連れて厨房に向かった。

カッ！

「！」

向かう最中にガドルが現れてゼルグは、ヴィッツと一緒に止まった。

「シェ・・・！」

ヴィッツは、行き成り止まったゼルグに疑問に成り聞こうとしたが何時もと違う鬼神の様な気迫を感じた。

ガドルも無言でゼルグを睨んだ。

「ヴィッツ・・先に厨房に行っていろ。」

「う・・うん・・・」

ヴィッツは、ゼルグに言われた通りに厨房に向かった。

「バガラグロンギバ！？」（貴様グロンギか！？）

ガドルは、カブトムシの怪人に変身した。

しかもグロンギ語を使っていた。

「ザバサ、バンザ？」（だから、何だ？）

ゼルグは、冷静な口調でガドルに聞いた。

「バンボゲゲルザ！？」（何のゲゲルだ！？）

ガドルは、そのままゼルグに襲い掛かった。

ヒュッ！ヒュッ！

だが、セルグは、軽々とガドルの攻撃をかわしていく。

「ギバダバギ、デガサザガ・・・ズンン！」（仕方ない、手荒だが・・・はぁっ！）

ゼルグもクワガタの怪人に変身してガドルを振り払った。

ガドルは、剛力態に変わって胸のアクセサリーを取り外して剣にした。

「ズンン！！」（はぁっ！）

ブン！

ガドルは、剣をゼルグに向かって振った。

キィン！

ゼルグは、素早く両腕に付けてある腕輪が双剣に成りガドルの剣撃

を防いだ。

「バガラボゲゲルゾドレス！」（貴様のゲゲルを止める！）

睨みながらガドルは、ゼルグに言い放った。

「パセザ、ゲゲルゾグスビザバギ。ギジャ、ジャシダブバギンザ。」

（我は、ゲゲルをする気は無い。いや、やりたくないんだ。）

「！？」

ガドルは、剣をしまい変身を解いた。

「どう言う事だ？」

ガドルは、ゼルグに理由がある様に見えた。

いつの間にかリントの言葉を話していた。

「我の霊石は、不完全だからだ。」

「不完全？」

ガドルは、ゼルグの言葉から「不完全」と言う言葉を聞いて驚いた。

「それは・・・・・」

それは、ダグハ（究極の闇）が生まれる遥か昔の話に成る。

ゼルグも昔は、グロンギ達と一緒にゲゲルを楽しむ愚かなグロンギの一人だった。

ある時、ゼルグは、他のグロンギ達と一緒にリントの集落をどちらが先に多くリントを殺せるかのゲゲルをしていた。

ゼルグは、戦えるリントだけでなく子供や女、老人をいたぶりながら殺していた。

しかし、このゲゲルに勝ったのは他のグロンギだった。

周りのグロンギ達が集落から引き上げのにも関わらずゼルグは、その集落にいた。

ザッ！

「ズンン！ヅラサン！」（ふん！つまらん！）

ゼルグは、ゲゲルに勝てなくて不愉快に成っていた。

ピィカッ！

「！」

急に太陽に近い光が現れた。

ゼルグは、振り向くと黒い石版が出没した。

「バンザ？」（何だ？）

ゼルグは、石版から只ならぬ気配を感じていた。

キィィィィッ！！

「う、あああっ！」

突如石版から波長が発せられてゼルグは、頭が割れそうな感覚に襲われた。

ピカッ！ピキィ！

ゼルグのグロンギのベルトが光り出してヒビが割れた。

（そうか・・死ねのか・・・）

ゼルグは、死を予知しても何の足掻きもしなかった。

自分が今までした行いに比べたら生やさしいと実感した。

キィィィィ・・・・

すると波長が鳴り終わった。

「？」

ゼルグは、何が行ったのか理解出来なかったが今までとまるで違う感覚に成っていた。

「！」

ゼルグは、集落で殺したリント達を見てさっきまで感じなかった物に襲われた。

『俺が罪も無いリント達を殺した。』

殺した・・・・殺した・・・・殺した・・・・殺した・・・

ゼルグの頭の中には、その恐怖の脳裏しか考えられなかった。

「あ・・・うわあああああぁぁぁ！！」

ゼルグは、怖くなり集落を去ってそしてグロンギの集落にも戻らなかった・・・いや戻れなかった。

あまりの怖い事をしている種族自体に行く勇気も無かった。

ピィカッ！

石版は、再びゼルグの前に現れて光り出すとゼルグを吸い込んだ。

気が付けばゼルグは、何処かの建物の中の部屋のベッドに寝かせられていた。

ガチャッ！

部屋の扉が開くと妙な姿の若い女性が食事を持って来た。

「お気付きに成りましたか？」

女性は、笑顔でゼルグに話し掛けた。

「・・・・」

ゼルグは、女性の言葉が理解出来ないのと自分がこの女性を殺してしまう恐怖に襲われた。

女性は、食事をテーブルに置くと目を閉じた。

（大丈夫ですよ。此処は、神の家です。誰も貴方を傷付けたりしません。）

「バンザ！」（何だ！）

（すいません。これは、念話と言う貴方の心に直接会話する魔法です。貴方は、一週間前にこの教会の近くで倒れていた所を私が見付けて手当てしました。）

女性は、ゼルグに説明をした。

それからゼルグは、その女性に言葉や知恵を教えられて特に料理を積極的に教えて貰った。

女性は、聖王に仕えるシスターにしてベルカの騎士でもあった。

女性の主な仕事は、貧しい者や身寄りの無い子供達の為に料理を与えたり職業を探してあげる事だった。

ゼルグは、彼女に戦士として必要な騎士道を叩き込まれた。

ある日、町は、原因不明の病が流行り次々と死体が倒れていた。

「ゴッホッ！・・・・ゴッホッ！・・・・」

彼女は、仕事を終えて教会に帰って来ると急に咳をしていた。

「主！？大丈・・・・！」

ゼルグは、彼女の口元を見ると紅い血を吐いていた。

しばらく彼女は、ベッドに寝る生活が始まった。

ゼルグは、彼女の為に栄養一杯の料理を作ったが一向に良くならなかった。

「ゼルグ・・ゴッホッ！ゴッホッ！」

料理を自分で食べられない彼女は、体に鞭を討ちながらゼルグを何処かの場所に連れて行った。

それこそ聖王の扉である。

「良いですか・・ゴッホッ！ゼルグ・・・聖王陛下から頂いた聖王の扉の中に入るのです。」

ゼルグは、聖王の扉に入るのを躊躇した。

しかし、彼女は、笑顔でゼルグを見た。

「もしかしたら、私は、この時の為に生かされて居たのかもしれません。お願いします。この聖王の扉を開ける新しい主が来たら多くの人達に貴方の自慢の料理で幸せにしてください。」

ゼルグは、それが彼女の遺言の様に思った。

「・・・解りました。お身体には、お気をつけてください。」

ゼルグは、クワガタの怪人に変身したまま聖王の扉の次元の中で眠りについた。

そう新たな主に巡り会うまで・・・・・

「・・・・」

ガドルは、無言のままゼルグの話を聞いていた。

「ガドルー！」

向こうからフェイトが来た。

「フェイト。いかがしましたか？」

ガドルは、何時もの表情に戻っていた。

「カリムとの話が終わったよ。」

「解りました。直ぐにお車の用意をします。」

ガドルとフェイトは、駐車場に向かった。

「さって・・・厨房に行くかヴィッツが足の痺れを切らせているだろうな・・・」

ゼルグは、ヴィッツに叱られる覚悟で厨房に行った。

オリジナルキャラクター紹介２（前書き）

オリジナルキャラクターを考えるのは大変です。

オリジナルキャラクター紹介２

コレオス・アルピーノ

性別：男性

身長：１７９ｃｍ

かつてゼスト部隊に所属しており魔力が無い。しかし身体力はゼスト部隊一である。

メガーヌの夫にしてルーテシアの父親。

ルーテシアには、過保護と言う位に溺愛している。

ルーテシア本人も父親の愛を受け入れている。

ギンガとスバルの母クイントとメガーヌとは、訓練校時代からの付き合い。

クイントとは、訓練校時代からの喧嘩友達で何時も喧嘩をしていた。

そのたびにゼストから喧嘩両成敗をされていた。

グロンギのモチーフは、ライオン。

風撃態：通常の形態で力、防御、スピードのバランスが整ったタイプ。

俊剛態：スピードと力は、あるが防御を大幅に失う。武器は、ライオンの爪を思わせるダブルクロー。
ちなみに風撃態は、鬣が茶色で俊剛態は鬣が藍色に変化する。
この作品で唯一リント（人間）からグロンギに成るキャラクターです。
今後の作品を読むと解ります。

オリジナルキャラクター紹介２（後書き）

今後は、コレオスとルーテシアとの親子話をします。楽しみにしてください。

１０話：子連れ獅子（前書き）

お久しぶりです。今回の話は、少しコメディーで少し残酷な表現がありますのでご理解ください。

１０話：子連れ獅子

オレは、大切な妻を・・仲間をあの日に全てを失ってしまった。

あの日・・オレの所属していたゼスト部隊は、任務中に何者かの襲来にあう。

「異常無しか・・」

オレは、訓練校時代からの喧嘩友達のクイントと妻のメガーヌと一緒に運搬中の部隊よりも先周りして安全を確認していた。

［こちらチームC！大変です！隊長が俺達を庇って！］

通信には、オレ達ゼスト部隊隊長のゼストの重傷の姿があった。

「わかった！今すぐにオレが向かう！それまで持ち堪えていろ！」

オレは、クイントとメガーヌと分かれてゼスト隊長の元まで向かう。

キィン！キィン！

オレが向かうとゼスト隊長以外は、皆死んで隊長がまだ何かと戦っている。

チラ！

ゼスト隊長の後ろには、眼帯を付けた少女がナイフの様な物を投げようとしていた。

「隊長！」

ドン！

オレは、隊長を庇う。

バン！

ナイフから爆弾の様な物が発動しオレの心臓に近い辺りに当たった。

「グブッ！」

バタン！

オレは、口から吐血を出して倒れた。

「コ・・・コレオスゥゥゥゥゥゥゥ！！！」

隊長は、オレを抱えたまま安全な場所まで避難した。

「コレオス！おい！しっかりしろ！」

オレは、さっきの攻撃のせいか隊長の声が聞こえるものの体が寒くなり感覚が薄れていく。

「！」

隊長は、懐からアル物を取り出す。

「た・・たいちょう・・それって・・任務運搬中の・・」

隊長が取り出した丸い宝玉は、任務で運搬をしているロスト・ロギアであった。

隊長は、オレの腹部にロスト・ロギアを押した。

キィィィンンン！！

ロスト・ロギアは、オレの体の中に入り今まで感覚が無くなっていたのが不思議と戻ってきたがまだ動けない。

「コレオス・・死ぬなよ・・・」

隊長は、まだ体が動けないオレに言うとデバイスを構えて敵の元に向かう。

「フル・ドライブ！！」

隊長のデバイスから大量の魔力が放出して敵に攻撃するが・・・

「ＩＳ発動！ライドインパルス！」

ブシュゥゥゥゥゥ・・・・

もう1人の敵の女が目にも止まらない速い攻撃に当たり隊長の体から大量の血が吹いていた。

「うおおおお！！！」

オレの体が不思議と力が沸いて来た。

「さっきの生き残りか！？」

隊長の息の根を止めた敵の女がオレを睨んだ。

「ハァッ！」

シュッ！

眼帯の少女がオレにまたナイフを投げて来た。

だが・・・

オレの目には、ナイフの速さがゆっくりとスローに見える。

シュッ！

オレは、ナイフを全て避けると少女に向かって拳を放った。

ドン！

少女は、何メートルも飛んだが、何時もよりも力が出る事に驚いた。
オレは、部隊の中で魔力が無いが身体能力が一番あるのに今の体が自分の体じゃない様にも思えた。
「貴様！」
隊長を殺した女が隊長を殺した時と同じ技をオレにして来る。
ザッ！
オレは、ガードすると体が変化した。
「こ・・これは・・！？」
まるでライオンの様な怪人の姿に変わった。
ピタッ！
女は、オレの姿を見た途端に目を疑った。
「貴様・・ターゲットを・・霊石を取り込んだな！」
「何の事だ！？」
女は、オレに対して殺気を増す。
ヒュッ！
次の瞬間に女は、オレに攻撃しに来る。

ヒュッ！

「な・・！」

「！」

気付くと女の素早い攻撃を避けていた。

正直にオレもビックリしている。

「はぁっ！」

ドン！

女に回し蹴りをして女の脇に当たり少女の時と同様に何メートルも吹っ飛ぶ。

［コレオス！どうしたの！？その姿！？］

クイントから通信が入るとオレの姿を見た瞬間に驚いた。

「それよりも・・隊長が！」

オレは、クイントとメガーヌに事情を説明した。

［解ったわ。兎に角・・ザー！ザー！

「おい！どうしたんだ！クイント！メガーヌ！！」

オレは、通信が繋がらなくなったメガーヌ達が心配になる。

シュッ！

「ん！？」

ドス！

ドーン！

オレが気付くと少女が投げたナイフに当たり爆発した。

「くう・・！」

オレは、この場を後にして急いでメガーヌ達の所に向かう。

「クイント！メガーヌ！」

コレオスは、二人の所に行くと。

「っ！」

目の前に広がる光景を見て悪夢と思える物が映る。
周りには、奇妙なロボット達の残骸とそのロボット達のパーツである刃にクイントとメガーヌが心臓辺りを刺されていた。
「・・・・だ・・・・れ・・・・・？」
気付くとメガーヌが虫の息の声で話し掛ける。
「メガーヌ！しっかりしろ！メガーヌぅ！！」
コレオスは、急いでメガーヌの元に向かう。
「コ・・・レオス・・・なの？」
メガーヌは、必死に両手をコレオスの顔に触り続ける。
「！？お・・・お前・・・目が見えないのか！？」
コレオスは、メガーヌの顔を見ると瞳に光が宿っていない。
「・・・死んじゃ・・・うの・・・かな？私・・・の代わり・・・にルーテシア・・・を守って・・・」
「馬鹿野郎！そんな事言うなよ！小さいルーテシアを置いて行く気か！」
ポタ・・・・ポタ・・・・・
怪人に成ったコレオスの瞳から涙が溢れ出る。

「う・・うん・・私は、何時でも・・・あなた・・・と・・・・ルー・・・テシアを見守って・・・いる・・・か・・・ら・・・・・・」

バタン！

コレオスの顔を触っていたメガーヌの手が地面から落ちた。

「メガーヌ？メガーヌゥゥゥゥゥゥ！！」

コレオスは、最愛の妻メガーヌを失って悲しみの雄叫びを上げる。

【私・・・の代わり・・・にルーテシア・・・を守って・・・】

コレオスは、メガーヌの最後に残した言葉を思い出して彼女の骸を置いてルーテシアの寝ている自宅に向かった。

そして、その日に幼いルーテシアを連れて自宅も売り払って逃げる様に出て行く。

ミットチルダの森の近くに二階建ての小さいロッジ。

「ルー♪起きなさい。朝だよ。」

コレオスは、ズボンとYシャツを着てエプロン姿のままロッジの二階に上がると小さなベッドの上に毛布でくるまっている少女に優しく声をかけた。

ドサッ

「・・・・・・」

少女は、ベッドから起き上がると長い紫髪が寝癖の状態で細目のまま現れた。

「・・・・おはようパパ・・・・・ぐぅ〜〜・・・・」

少女：ルーテシアは、そのままコレオスの胸元に寄りかかって寝始める。

「あ〜〜まったく、仕方ない子だな♪」

コレオスは、ルーテシアを洗面所に連れて行くと顔を洗わせて寝間着から普段着に着させる。

ルーテシアを食事が並んでいるテーブルに座らせる。

コンコン！

ドアからノックが響いた。

「私が開ける。」

ルーテシアが玄関に向かって開けるとコレオスと同年代の美女が立っていた。

「ルーおはよう。」

「おはようアイシスさん。」

「おはようアイシス。」

アイシスは、そのままテーブルに座るとコレオス達と一緒に朝食を食べ始めた。

「外に出て来る。」

「危ない場所には、行くんじゃないよ。」

コクン！

ルーテシアは、頷いて外に出た。

「もうメガーヌ達が死んで数年も経つのね。」

「ああ…」

アイシスは、コレオスやルーテシアとクイントと同じ訓練学校出のフリーの召還師だった。

数年前

ザーッ

ロッジの窓から雨を見ていると若い男が何かを抱えてさ迷っていた。

よく見るとコレオスだと解りアイシスは、慌てて山小屋から出て来た。

「コレオスどうしたの！？その姿は！？」

窶れたコレオスに驚いたアイシスは、雨の中で駆け寄った。

「た・・・頼む・・匿って・・・・くれ・・・・・」

バタン！

コレオスは、疲れながらも抱き抱えいる物を傷つけ無い様に地面に倒れ込んだ。

「えっ！？ちょっと・・・ん？」

アイシスは、コレオスが抱き抱えている物を見るとまだ一才にも満たない赤子がスヤスヤと寝ていた。

「ん？こ・・此処は？」

コレオスは、目を開けるとベットに寝かせ付けられていて隣では赤子が寝ていた。

「気が付いた？」

赤子の近くにアイシスが座っていた。

「コレオス・・どう言う事なの？」

アイシスは、コレオス親子に何かワケありだと直感して聞いた。

「それは・・・」

コレオスは、アイシスに事の全てを説明した。

「メガーヌが・・・・なるほどね・・」

アイシスは、目尻から出ている涙を拭き取るとコレオスが話した内容を聞いて考え込む。

「わかったわ・・・メガーヌとは、幼なじみだしアンタとこの子に何かあったら死んだメガーヌに合わす顔が無いわ。良いわよ。」

「悪いな・・・・」

「気にしないで、訓練所からのよしみじゃない。」

それからアイシスは、オレ達をロッジに住まわせてくれた。

夜は、仕事の為アイシスが居ないので家事の全般をオレに任せてくれた。

そのお蔭で大体の家事を一人でこなせる位までになった。

「まあ、此処に来たアンタは、今から考えてみればまるでホームレスか開拓民によって追われている原住民みたいだったわね。」

「ハァッ！？そんなにおかしかったのかよ！？」

コレオスは、此処に来た時の自分の想像が出来ずにいた。

「それよりも・・・アノ子・・・ルーテシアの事で良いかしら？」

「ん？どうしたんだよ？」

「実はね・・・」

「$&$&(,)*‘,”!%,・・・・」

アイシスは、仕事の為ロッジの裏で召喚魔法の練習を行っていた頃

「$&,#”(・・・・ん？ルーテシア？」

アイシスは、視界にルーテシアを確認すると召喚魔法の呪文をやめた。

「アイシスさん。私のママは、どんな人だったの？」

「ルーテシア・・・・」

アイシスは、ルーテシアが物心ついた時にはもうメガーヌがこの世から居ない事に哀れに感じて仕方なかった。

「アナタのママ・・・メガーヌはね、私何かより優秀な召喚師で誰よりも優しい人だったわ。」

「教えて・・召喚魔法・・」

「えっ！？」

「それで・・・？」

コレオスは、その後の話が気になり始める。

「まずは、基本的な召喚魔法から教えるからゆっくりで良いから始

めて。」

「・・・わかった。」

「まずは、目を閉じて心を無に等しくして。」

「・・・・・・・」

ルーテシアは、目を閉じて集中し始めた。

「次に心で念じてそうすれば相手のモンスターが直接アナタの心に話しかけてくる筈よ。」

コクン・・・

ルーテシアは、目を閉じたまま頷く。

（まあ、最初から出来るワケないわよね・・・私でも最初の頃できるまでに数ヶ月掛かったんだから。）

アイシスは、召喚魔法が通常の魔法よりも高等で誰でも扱えない種類を知っている。

キィィィンンン・・・・・

「！？」

アイシスは、ルーテシアの周りを見渡すと紫色で書かれた召喚魔方陣が出て来たのを見て驚いた。

「来て・・・ガリュー・・・・」

ピカァア！！

「・・・・・・」

魔方陣から虫か人かの魔神が現れた事にアイシスは、唖然とする。

「コレで良いの？」

ルーテシアがアイシスの顔を覗いて聞く。

バタン・・・・

「あっ・・・・ガリュー。」

コクン

ガシッ！

アイシスがルーテシアの天性的な召喚魔法の才能を見て気絶して倒れる時ルーテシアがガリューに命じてアイシスを抱きかかえた。

ガチャン！

アイシスの話を聞いていたコレオスは、握っていた紅茶の入ったカップを床に落とした。

「ルー・・・が召喚魔法を！」

コレオスは、目を丸くしながら驚いた。

（無理もないわね・・・）

アイシスは、ルーテシアにそんな才能があった事を知らなくショックを受けるコレオスが当然だと思ったが！

「ふっふっふっ・・・はっはっはっはっはっ！！」

コレオスは、行き成り外に居るルーテシアの方に走り出した。

ドッドッドッドッドッ！！

コレオスの足音は、大地を響かせる。

「ル～～～～～～～～ッッ！！」

「！」

ルーテシアも正面から突然走って来た父親に驚く。

ガシッ！

コレオスは、力一杯ルーテシアを抱きしめた。

「ル～～～～♪何で召喚魔法が出来た事をパパに話さなかったんだ～～～～～♪」

コレオスは、死んだメガーヌに似て召喚魔法の才能が引き継がれていた事に喜んでルーテシアの白くて柔らかいホッペを自分のホッペを近づけてスリスリしていた。

「／／／／／／／」

実は、ルーテシアかなりのシャイで言わなかったが父親のコレオスに褒められて内心嬉しかった。

「あ～あ～・・始まったわね・・」

心配したアイシスは、コレオス達の所に来た。

「ルーテシアこれからどうするの？私教えても良いけど・・それだったら管理局の訓練校に行けばもっと上手くなるわよ。」

「・・・う「駄目だっっ！！」！？」

ルーテシアが答えようとした途端にコレオスが割って入って来た。

「ちょっとコレオス！？何でそうなるのよ！」

「ルーは、まだ子供だし遊んでいたい年頃の子なんだぞ！！」

「アナタね・・ルーテシアには、素晴らしい才能が有るんだからそれを伸ばさないでどうするのよ？」

アイシスは、コレオスがルーテシアに過保護過ぎるので説得するが・・

「オレからルーを奪う気か！！オレは、絶対認めないぞ！ルーをあんな血の飢えた獣の巣窟に落とす何でゼッテェー認めねぇ！！」

コレオスは、涙目でルーテシアを抱き締めながらアイシスに主張した。

「・・・全く頑固なんだから・・・そうね、まだ遊びたい年頃ね。」

アイシスは、コレオスの過保護を知っていたので諦めた。

「それより、コレオス。家のポストにこんな物が入っていたわよ。」

アイシスが紙をコレオスに渡すと『バーゲンセール！ガールズウェア６０％割引』と書かれた紙だった。

「そうか・・・（ルーも同じ服じゃあ可哀想だしな・・・）じゃあ一緒に明日首都のクラナガンに行くか。」

コクン・・

こうしてコレオスは、ルーテシアを連れて数年ぶりの首都クラナガンに行く事に成った。

１０話：子連れ獅子（後書き）

次回は、機動六課のフォワード達が休日を使って首都クラナガンに出ます。

あと閣下（ガドル）とコレオスが出会い面白くします。

実は、この二人の共通点が『過保護で親馬鹿』と言う共通点があります。

それでは、失礼します。

１１話：とある休日（前編）（前書き）

久しぶりの閣下と金色の死神の新しい話ですので悪質な感想やメッセージは、やめてください。今回の話は、コメディっぽいと個人的に思います。

11話：とある休日（前編）

ティアナがガドルと一緒に帰って来て模擬戦でも問題無く終了して数日が経った。

「はぁっ・・・はぁっ・・・」

練習で疲労困憊に成っている機動六課フォワード。

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様。」

フォワード達の目の前には、なのは、ヴィータ、フェイト、ガドルの４人がいた。

「それでね、今日の模擬戦が第二段階の見極めテストでもあったんだけど。」

【！】

フォワード達は、驚いた。

「どうだった？」

なのはは、他の3人に聞いた。

「合格。」

「まぁこんだけミッチリやって問題あるようなら大変だって事だな。

（今日のアイツそれを聞くまでアタシ達に凄い殺気だったけどな・・

・）」
ヴィータの隣に居るガドルに注意していた。
「そういうワケで第二段階終了！デバイスは、シャーリーに渡してね。３日間お休みだから。」
【わ～い！】
フォワード達に歓声の声で盛り上がっている。
こうしてフォワード達の休日が始まった。

「数年ぶりだな首都クラナガン。」
バス亭を降りてデジムジャケットを羽織ったコレオスがルーテシアを連れてクラナガンを見ている。
「此処に昔パパとママが住んでいたの？」
ルーテシアは、コレオスを見て言う。
「そうだよ♪この町に住んで居たんだよ。」

コレオスは、目的のルーテシアの服が売っているデパートに向かう。
ルーテシアもコレオスの後をついて行く。

「ハンカチ持ったね？ＩＤカード忘れてない？」

「ええっと・・大丈夫です。」

機動六課の入り口では、フェイトが始めて自分一人で外に出るエリオの心配をしていた。

「フェッ・・フェイト！落ち着いてください！」

過保護過ぎて戸惑っているエリオを可哀想に思ったガドルがエリオのフォローに入る。

「あっ！お小遣い足りてる？もしも足りなくなると困るから「あのフェイトさん！」

フェイトが自分のお金を出そうとするとエリオが止めた。

「その・・僕も自分でお給料を頂いていますから！」

「エリオの言う通りですよ。」

ガドルもエリオの方が正しいと思えた。

「ああ！そうか・・」

フェイトも今気付いた。

「大丈夫です！ありがどうございます。」

「ん？エリオ少しお前の電子手帳を見せて貰ってもいいか？」

「は、はい。」

ガドルは、今日エリオの行く所に嫌な予感がして見せてもらった。

（やはり・・・）

ガドルの予感は、的中した。

エリオが今日行く予定を作ったのは、起動六課のデバイスを調整整備しているシャリオ・フィーノ：シャーリーが作った物だった。

ポチ！

ガドルは、次の瞬間電子手帳に刻まれた今日の予定表をリセットした。

「え！？ガ・・ガドルさん？」

ポン！

ガドルは、無言のままエリオの肩を叩く。

「エリオ・・・今日位は、自分で思った所に行くんだ。他人の頼っていては、本当の男に成れないぞ。」

「はい。」

エリオが外に出た後ガドルは、シャーリーの研究室に向かい凄く痛いお仕置きをした。

「ふ～～～っ・・・さてデパートに行く前に腹ごしらえと行くか。」

コレオスとルーテシアは、デパートの近くに有るカフェテリアで昼食を取り始めた。

「ルー♪好きな物を頼みなさい。」

コクン・・

ルーテシアは、メニューを開けると直ぐに『メロンパフェ』を指差した。

「すいませ〜〜〜ん。メロンパフェと六段アイスクリームお願いします。」

「かしこまりました！」

ウェーターは、幻の六段アイスクリームを注文する客に驚いて厨房に連絡した。

「すいませ〜〜ん！あたしも六段アイスクリームお願いします！」

コレオス達の後ろ隣のテーブルからコレオスと同じ注文をする少女がいた。

「むう！（アイスクリームの高さでオレに挑むとは！）」

コレオスは、少しムキに成りウェーターを呼んだ。

「オーダー変更で六段から七段にアイスクリームを変えてください！」

すると

「コッチは、八段に変えてください！」

「いいや！九段！」

「十段！」

ボコン！

「こら！アンタ何他人と競っているのよ！」

少女の隣に居た少女が少女を止めた。

「パパ・・・駄目・・」

ルーテシアから注意されて反省するコレオス。

少女を止めた少女が少女を連れて前に来た。

「すいません。スバル！アンタも！」

「すいません・・」

「いや・・此方こそ・・ん？」

コレオスは、スバルを見て誰かに似ていた。

「ワリィが・・嬢ちゃんの名前は？」

「えっ？スバル・ナカジマですが・・」

「あーーー！！」

コレオスが叫ぶとスバルとティアナがビクッ！とした。

「もしかしてお袋さんがクイント・ナカジマじゃねえのか？」

「ええ・・死んだ母は、クイントですけど・・」

ガシッ！

「えっ！？」

コレオスは、スバルの両脇を持つと高い高いした。

「はっはっはっはっはっ！！そうか！スバルちゃんか！いや～～大きくなったな～～～♪はっはっはっはっはっはっ！！」

「えっ！？もしかしてコレオスおじちゃん！？」

スバルもコレオスを見た瞬間に思い出した。

昔、何時も母と仲良く喧嘩してスバルと姉のギンガを我が子の様に可愛がってくれたコレオスを思い出した。

「ウワ～～～～♪久しぶりだね～～～～♪」

「はっはっはっはっ！久しぶりだな！」

コレオスが笑っているとスバルも笑い返した。

「ちょっと二人とも！周りの人達が見ているんだから！いい加減にしなさい！！」

ティアナのカミナリが落ちてしばらく二人は、反省していた。

「いや～～行き成り出会って食事まで奢って貰ってありがとうコレオスおじちゃん。」

「はっはっはっはっ！な～にこんなのお安いご用さ。」

結局コレオスのお金でスバルやティアナは、食事をさせて貰った。

「あっ！もうすぐバーゲンの時間に成る！スバル！そこにお金置いておくからな！じゃあな！」

コレオスは、ルーテシアを連れて急いでデパートのバーゲン売り場に向かう。

【これより子供服バーゲンが始まります！】

コレオスは、ルーテシアをデパート内の椅子に座らせると他の母親達と同様に血走っていた。

【それではスタート！】

ドッドッドッドッドッドッドッドッドッドッドッドッドッ！！

母親達は、全力疾走で走るがコレオスも母親達の波を力で弾き飛ばして服が並ぶ場所まで一目散に着く。

コレオスが一枚の服を取ると他の母親達が奪うが・・・・

ヒュッ！

ドシィン！

コレオスは、瞬間的に交わして母親達が次々に倒れる。

次の服を選ぶと母親達は、その服を奪うがまた同じ様に交わして次の服に向かう。

数分後

「はっはっはっはっはっは！ルー♪お前に似合う服を買ってきた・・・・ぞ？」

コレオスは、ルーテシアが座っているベンチに来るとルーテシアが居ない。

「ルー！ルー何処に居るんだ！！ルーーーーーッッ！！」

デパート内にコレオスの叫び声が響いた。

「どうしよう・・・・」

エリオは、首都クラナガンに来たのが良いが何をすれば良いのが解らなかった。

（とりあえずジュースでも買って考えよう。）

エリオは、自動販売機に向かうと販売機の隣のベンチに少女が困った表情で座っていた。

（どうしよう・・・パパとはぐれちゃった・・・）

ルーテシアは、コレオスの帰りが遅いので尿意が来てトイレを探しても見つからないから外に出てようやくトイレを発見出来て用が終わって戻ろと思ったが帰りが解らなく成ってしまった。

「はぁ～・・・・・」

ルーテシアは、溜め息を吐いていると自分の前に人の気配に気付いて振り向くとエリオが立っていた。

「君どうかしたの？」

エリオは、心配そうな表情でルーテシアを見る。

「・・・パパが迷子に成ったの・・・・」

「君が迷子なの？」

「ううん・・・・パパが迷子に成ったの。」

（君が迷子なんだね・・・・・）

エリオは、意地に成っているルーテシアの答えに恥ずかしいと言う気持ちが混じっている事に気付く。

「僕の名前は、エリオ・モンディアル。君の名前は？」

「・・・・ルーテシア」

ルーテシアもエリオが名乗ったので自分の言った。

「よ・・・良かったら僕と一緒に居ない？パパが見つかる間。」

コクン

ルーテシアは、頷いてエリオの後に付いて行った。

（エリオは、今どうしているのだろうか・・・・）

ガドルは、町に出かけたエリオが内心心配になる。

「ガドル。」

「何でしょうかフェイト？」

ガドルは、フェイトを乗せて車を走っていた。

「エリオが心配？」

「・・・・正直言えば心配です。」

ガドルは、フェイトに正直に答えた。

「行って来なよ。」

「フェイト？」

「心配なんでしょう？エリオの事が。」

フェイトは、ガドルに車を止める様に指示するとガドルを運転席から外してフェイトが乗った。

「此処から先は、私が運転して行くからエリオの所に行って。」

フェイトは、笑顔でガドルに言う。

「ありがとうございます！」

ガドルは、町に向かった。

「うわーっ！凄い大きい魚だ！」

「可愛い・・・・」

「観覧車っで見ると迫力あるな。」

「クラナガンが小さく見える。」

エリオとルーテシアは、その間に遊園地や水族館で遊んだ。

「大分遊んだね！」

コクン

エリオとルーテシアは、ベンチに座りソウトクリームを食べながら話していた。

其処へ！

「ルーーーーーッッ！」

エリオ達の正面から男の叫び声がする。
よく見るとルーテシアの父親のコレオスがルーテシアに駆け寄る。
ガシッ！
「ルー！心配したんだぞ！」
コレオスは、泣き顔でルーテシアに言う。
「あ・・・あの・・・・・」
ギロ！
「ひっ！」
エリオがコレオスに話し掛けると獅子の如き睨みでエリオを睨む。
「貴様がルーを誘拐したのか！」
「えっ！？」
言い掛かり付けたコレオスに戸惑うエリオ。
「パパ・・・違いよ。私が迷子に・・・成ったから一緒に探してくれたんだよ。」
ルーテシアがエリオのフォローに入る。
「そうだったのか・・・・すまない事をしたな。」

「いいえ、誤解が解けて何よりです。」

エリオがホッとした。

「ルー、パパが居ない間寂しかったか？」

フンフン！

「えっ！？」

ルーテシアは、頭を横に振った。

「エリオ・・・パパが見つかるまで遊園地や水族館に連れて行ってくれた。」

「何ーーーーーッッ！！？」

コレオスは、気が狂う様な叫び声をあげた。

「き・き・貴様！」

「えっ？えっ？？」

エリオは、戸惑った。

「責任を取ってルーのお婿さんに成れ！！」

「ちょっと！何でそう成るんですか！？」

「いいか！男がな女をデートに誘う行為はな！その女を一生守るって事なんだよ！」

「べ、べ、別に僕はそんなつもりでやったんじゃ・・・・「責任取ってルーのお婿さんに成れ！」ひっ！」

コレオスは、エリオを追い詰める。

しかし

ガシッ！

「ん？」

コレオスは、右手が何かに掴まれている事に気付く。

「お前・・・エリオに何している！」

「ガドルさん！」

行き成りガドルが居る事にエリオは、驚く。

「お前は、誰だ？」

コレオスがガドルに聞いた。

「私は、ガドル。この少年エリオの保護者だ！」

ガドルは、コレオスに名乗った。

「保護者だと？じゃあ話は、早いエリオとか言う坊主をウチの娘のお婿さんにしたい。」

「何訳の解らない事を言っているんだ？今エリオは、大事な時期だそ。」

「いいや！ウチのルーだって恋する大事な時期なんだ！」

コレオスは、ガドルに負けじと言い返す。

「くだらん。行くぞエリオ。」

ガドルは、エリオを連れ帰るが「おい！待てよ！」

ガドルは、コレオスの声を聞き振り返った。

「オレは、コレオス・アルピーノ。ルーテシアの父親であり保護者だ。」

コレオスは、堂々と言う。

「覚えておこうコレオス・アルピーノ。」

ガドルは、エリオを連れて去った。

「さぁ帰るぞルー♪」

コクン

コレオスとルーテシアは、帰りのバス停に向かう。

「えっ？帰りの最終便が終わってる！？」

コレオスは、バス停の時間表を見ると最終便が終わっていた。

「どうするか・・・・・」

コレオスは、悩んだ。

野宿も考えたがルーテシアが風邪でも引いてしまうし、お金もバーゲンの時大半以上を使ってしまった。

「困ったな・・・・・「コレオスか？」ん？」

コレオスが振り返ると初老に近い男とスバルに似た長髪の少女が車から降りた。

「ゲンヤ・・・・ゲンヤの兄貴！」

「おお！やっぱりコレオスか！久しぶりだな！」

コレオスとゲンヤは、挨拶をかわした。

「パパ・・・誰なの？」

ルーテシアがコレオスの顔を見る。

「この人は、昼間に会ったスバルってお姉ちゃんのお父さんのゲンヤ・ナカジマだ。パパと同じ凡人で尊敬する凡人の中の凡人だよ。隣に居るのがお姉さんのギンガ・ナカジマだよ。」

コレオスは、ルーテシアに説明した。

「お久しぶりですね。コレオスさん。」

「おぅ！久しぶりだなギンガ！」

「貴方も元気そうで何よりです。」

「ああ！しっかしアノ突進娘のお前がこんなにも母ちゃんのクイントに似てきて美人に成ったな！」

「えっ！？ちょっと！突進娘ってなんですか！？」

ギンガは、コレオスの言った発言に少しムッときた。

「はっはっはっはっはっ！！な～に、オレから見ればお前なんてまだまだ子供の分類だぞ。」

コレオスの言葉でますますムキに成るギンガを見てゲンヤは、懐かしさと苦笑いな表情になる。

「おやっさん！ギンガ！まだかい！？」

車からゲンヤとギンガと違い私服の男が現れてた。

「おっ！すなねぇなフォルティス！」

フォルティスと呼ばれる男は、ソフトモヒで黒いTシャツとジーンズを来たギンガと同い年の男だった。

「大丈夫よ。直ぐ戻るわフォルティス。」

ギンガは、コレオスの時と違い笑顔でフォルティスに答える。

「コレオス、何かワケでもあるようだな？どうだ？ウチに泊まって行くか？」

「へっ！？良いのかよ？ゲンヤの兄貴？」

ゲンヤの発言にコレオスは、驚く。

「おうよ！泊まって行きな！」

ゲンヤの言葉に甘えてコレオスとルーテシアは、車に乗る。

「兄貴・・・ゲンヤの兄貴！」

小声でゲンヤに言うコレオス。

「ん？どうかしたか？」

「今運転している奴って何者だよ？」

「ああ！コイツは、フォルティス・ラリーアートって言って４年前に記憶喪失で身元が解らないから俺が身元引受人で通している奴だ。今は、ミッドチルダのプロライダーチームに所属しているプロライダーだ。」

「へ～～～～っ・・・・・」

コレオスは、フォルティスの凄さに驚く。

しかも！

フォルティスの運転席の隣の助手席には、ギンガが座っており笑顔だった。

「ってゲンヤの兄貴。まさか！」

「ああ！交際は、俺が認めた。」

「・・・・・へっ？ゲ・・・ゲンヤの兄貴？今何て？」

「ん？言った通りだぞ。俺が二人の交際を認めた。」

「何で？」

コレオスは、ゲンヤの娘ベッタリを知っていた。

普通なら娘に近寄る男は、ボコボコにする様なゲンヤだが何か理由があると思った。

「いやな・・・４年間スバル達と住んでいる内にフォルティスがだんだん自分の息子の様に思ってきてそれでギンガの交際を認めたんだ。」

ゲンヤは、スバルとギンガが小さい頃に母親であるクイントを亡くして寂しい思いをさせてきたのでなるべくその寂しい思いを解放してやりたいと言う親心が密かに芽生えていた。

「あっ！そうだ。ゲンヤの兄貴、昼間スバルに会ったぜ。」

「おう！そうか。俺も聞いていたから今日の夜には、家に帰ってくるらしんだ。」

ゲンヤとコレオスが話している間にナカジマ家に到着した。

車からゲンヤとコレオスそしてルーテシアは、外に降りた。

「お父さん。私は、フォルティスと一緒に駐車の手伝いに行ってから来ます。」

「おう、わかったぞ。」

ギンガは、フォルティスと一緒に駐車しに行った。

ゲンヤが玄関の近くに行くと明かりが灯っていた。

「おかえりなさいお父さん。」

玄関では、スバルが出迎えてくれた。

「あれっ！？コレオスおじちゃん！？」

スバルは、ゲンヤとギンガそしてフォルティスが来る事を知っていたがコレオスとルーテシアが来ている事に驚く。

「実はな、コレオス達が帰る筈だったバスが時間帯を間違えたらしんだ。今夜ウチに泊まる事に成った。」

ゲンヤがコレオス親子の事情をスバルに説明した。

「わ～い！じゃあ、当分ウチに泊まっていくんだね？」

スバルは、コレオスに聞く。

「そうだな・・・・じゃあ3日間だけ泊まるか？ルー？」

コクン

ルーテシアは、頷いた。

こうしてコレオス親子がナカジマ家に3日間お世話になる事に成った。

１１話：とある休日（前編）（後書き）

次回もエリオくんとルーテシアちゃんの話をします。近い内にギンガとフォルティスの話もしたいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0671h/

閣下と金色の死神

2010年10月17日03時13分発行